

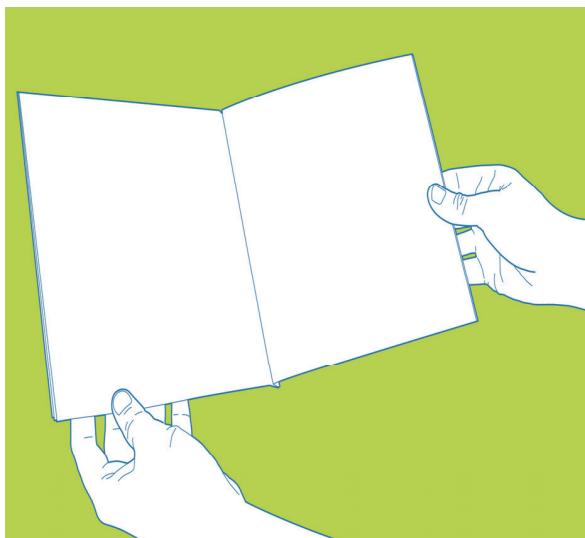
ISSN 1344-5081

北海道教育大学附属図書館

図書館報

90号

平成25年3月22日発行



02 平成24年度図書館活性化 プロジェクト報告

- 附属図書館書評コンテスト審査結果
- 全学ビブリオバトル
- 学生選書委員会
- Book Cafe in ASAHIKAWA
- 図書館学生センター活動
- 職員雑記・全学ビブリオバトル

06 書評コンテスト入賞作品

- 人生の師となる本との出会い
- 中国文学を貫くもの
- 衣食足りて、榮辱を知る
- 図書館戦争
- 希望の旅立ち

11 教職員著作物受贈一覧

12 附属図書館からのお知らせ

平成24年図書館活性化プロジェクト報告

平成24年度図書館活性化プロジェクト概要

平成20年度から実施してきた図書館活性化プロジェクトも今年で5年目となりました。今年度は、学生サポーターとの協働事業を全館で開始し、各プロジェクトの企画運営に加わってもらいました。参加学生との協働はまだまだ試行錯誤の段階ですが、今後もより一層進めていく予定です。

プロジェクト一覧

書評コンテスト2012（全館）

応募数23編

応募期間：平成24年7月～11月

学生サポーター（全館）

札幌16人　函館6人　旭川23人

釧路9人　岩見沢9人

平成24年4月～25年3月

ビブリオバトル（全館）

実施回数11回

平成24年5月～12月

学生選書ツアー

（札幌・函館・釧路・岩見沢）

実施回数10回

平成24年7月、11～12月

学生選書委員会（旭川）

参加人数8人

平成24年7月～12月

ブック・カフェ（旭川）

「かずをみつけよう～こんなところに数学が」

平成24年11月9日（金）

附属図書館書評コンテスト2012

附属図書館書評コンテスト2012は、「本との出会いを大切にし、すばらしい本との出会いを皆さんに伝えてほしい」という趣旨で作品を募集しました。

（募集期間：2012.7.27～2012.11.30）

これまで第1回から4回までは、「北海道教育大学附属図書館懸賞論文」という名称で小論文・読書感想文・小説（小説は第4回のみ）を募集していましたが、今回は図書館利用促進および読書推進という目的から「書評」に絞ることにしました。応募数が23編と昨年に比べて半減したのは残念でした。

平成25年2月8日の審査委員会で、以下の5編が受賞作に決まりました。作品はp.6～10に掲載しています。

【優秀賞】

■ 中居みよさん（教員養成課程教育臨床専攻）

「人生の師となる本との出会い」

【佳作4編】（五十音順）

■ 小田健太さん（教育学研究科教科教育専攻）

「中国文学を貫くもの」

■ 酒井和さん（教員養成課程国語教育専攻）

「衣食足りて、榮辱を知る～現代人に問い合わせる『史記』～」

■ 高橋夢奈さん（教員養成課程養護教育専攻）

「図書館戦争～表現の自由を守りぬくために～」

■ 西内正志さん（教育学研究科高度教職実践専攻）

「希望の旅立ち」

全学ビブリオバトル

平成24年12月14日、附属図書館で全学ビブリオバトルを開催しました。ビブリオバトルとは、お気に入りの本を持ち寄って、その面白さを5分間で紹介し、どの本が一番読みたくなかったかを参加者の投票で決める書評合戦です。

これまでキャンパス毎にビブリオバトルを開催してきましたが、今回初めて5キャンパスをテレビ会議システムで結んで全学イベントとして開催しました。カメラに向かって本を紹介するという通常とは違う形式のため少々話しにくかったようですが、本好きの学生たちによる、キャンパスを超えた交流の機会になりました。紹介された本は以下の5冊です。

- 内藤大助著『いじめられっ子のチャンピオンベルト』講談社（チャンプ本）
- 吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』岩波文庫
- 千早茜著『魚神』集英社
- ニール・ゲイマン著『コララインとボタンの魔女』角川書店
- モーパッサン著『ロックの娘；ミス・ハリエット他9篇』岩波文庫



学生選書委員会（旭川館）

平成24年度の図書館活性化プロジェクトで以前から温めていた企画「学生選書委員会」を実施することができました。図書館の本は、自分や周囲の友達だけではなく、他の専攻の人やこれから入学してくる将来の後輩たちも含めてたくさん的人が長く使う図書です。そういう図書館ならではの特性を踏まえて、自分の必要としている本はもちろん、図書館にはどんな本があってどんな本が足りないのか、何があれば自分の卒業後もみんなの役に立つか、学生の立場から時間をかけてじっくり考え調べ、広く深く長い視点を持って選書してもらいたいと考えていました。

7月に選書人を募集し、11月まで数回の打合せを重ねたうえで、157冊の図書を選定しました。第1回目の展示が10月、第2回目が12月、第3回目を1月と3回にわけて展示しました。（選書リストは旭川館ホームページでご覧いただけます。）

選書人は、自分の選んだ本のPOPを試行錯誤しながら一生懸命書いてくれました。その甲斐があって、展示は入館者の興味を引き、常に貸出中の本がある人気コーナーになりました。



実際に選書した学生からは、「選書に制限がなく自由に本が選べてよかったです」「興味のある分野はもちろんそれ以外の分野にどんな本があるかわかった」「また参加したい」などの意見の他に、「学生の専攻に偏りがあったので、ジャンルに偏りがあった」「選んだ本の感想を聞きたかった」などの意見が出ました。

選書人はもちろん、利用者の学生にも楽しい企画になったと思います。そして図書館スタッフもとてもいい勉強になりました。皆さんの寄せてくれた感想や改善点を踏まえ、次年度はもっと良い企画を考えていきたいと思います。

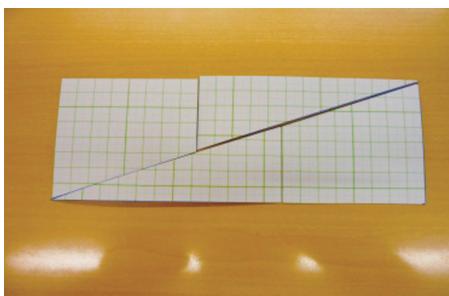
Book Cafe in ASAHIKAWA (旭川館)

今年で4回目となるBook Cafe（平成24年11月9日開催）。「かずをみつけよう～こんなところに数学が」というテーマで、数学教育専攻の学生が企画し、お茶やお菓子を囲みながら楽しい話を聞かせてくれました。

イベントは、学生おすすめの本の紹介から始まりました。3人の学生が『数学ガール』シリーズ、『面白くて眠れなくなる数学』シリーズ、『「算数を探しに行こう！」』についてそれぞれ魅力を語ってくれました。



続いては、参加者全員で“数学パズル”に挑戦！ フィボナッチ数列を使ったパラドックスの世界に参加者は頭を悩ませていました。紹介された本やクイズについては、旭川館ホームページに掲載しています。



最後は、数学教育専攻の奥山先生による数学談話。「かずを探しにいこう」というテーマで、日常の中にある、かずにまつわる楽しいお話をしてくださいました。

会場には、学生が選んだ数学に関する本を展示し、イベント終了後は図書館内でも展示しました。

企画してくださった数学教育専攻のみなさん、楽しいひとときをありがとうございました。

図書館学生サポーター活動（全館）

今年度、附属図書館でおこなった図書館学生サポーターとの協働事業は以下のとおりです。

- 所蔵図書の企画展示
- ビブリオバトル
- 学生による選書
- 図書館ブログ
- オープンキャンパス公開講座
- ブックカフェ
- 館内写真展
- 読書会
- フリーぺーパー「ポラリス」創刊
- 北海道大学図書館サークルとのビブリオバトル・交流会の開催
- 図書館改善のための提案

●学習環境の改善

学生サポーターの要望を受けて、札幌館では閲覧室内にドリンクコーナーを設けて飲み物禁止エリアとの区分けを実施、また会話のできる共同学習スペースを設置しました。釧路館では、網戸の設置と閲覧席のレイアウト変更、教科書コーナーの教科別見出し設置をおこなって、学習環境の快適化に努めました。

●企画展示



学生サポーターがテーマや図書を選んで所蔵図書の展示をおこないました。函館館では、「函館」「論文・レポートお助け本」「図書館学生サポーターの心に残った本」「図書館アルバイトとサポーターが欲しかった本、入荷します」、釧路館では「図書館を知る」「教師の仕事に迫る」「秋によみたい本」「子どもにすすめたい本」「北海道探検」

「古今東西恋愛特集」をテーマに2～3ヶ月1回ペースで図書を入れ替えて展示しました。



●他大学との交流

ビブリオバトルが縁となり、札幌館学生センターと北海道大学の図書館サークルとの交流会が実現しました。平成25年3月3日に北海道大学附属図書館で開かれ、ビブリオバトルや図書館での企画展示・読書会などの活動を報告しました。



●学生センター感想～一年間の活動を終えて～函館館学生センターの感想を紹介します。

- ・展示の企画から本選び、ディスプレイまで一から考えるのは大変だったけど、楽しかった。
- ・人に興味を持ってもらえるような企画を考え実行するのはなかなか難しかったが、学生時代に経験できたので将来に活かしたい。

今後も図書館利用促進・学習支援を目指して学生センターとの協働を続けていきたいと思います。

職員雑記 全学ビブリオバトル

岩見沢校では学生サークルが早くから活動し、「知的書評合戦ビブリオバトル首都決戦2011」で優勝するなどビブリオバトルが盛んに行われていました。

全学ビブリオバトルを開催するにあたり、サークルのメンバーからアドバイスをもらうため職員が実際にシミュレーションを行ってみました。1人5分、1冊の本を紹介し2分のディスカッションの後、どの本が1番読みたくなかったかを決めるというルールで真剣にバトルを行いました。人前で発表するというだけで大大大緊張するというのが正直な気持ちで、何日も前からソワソワしていました。初心者の私達ですが発表者の気持ちがよくわかった体験でした。

岩見沢校予選会は11月22日。5人の発表者が出場していろんなジャンルの本を紹介してくれました。接戦の中からメディアデザイン専攻4年下出翔子さんのニール・ゲイマン著『コララインとボタンの魔女』が見事チャンプ本に選ばされました。

本戦当日は多くの観戦者が集まりとっても嬉しかったです。5校の代表者がどんな発表をするのか、そして今までに読んだことのない新たな1冊をみつけられるかが楽しみでした。

下出さんは予選会と同じ『コララインとボタンの魔女』で参戦しました。惜しくもチャンプ本にはなりませんでしたが、予選会とはまた違う視点からの発表で読んでみたい！と思わせる内容でした。

アンケートではとてもよかったですという多数のお声をいただき、今度は是非出場してみたいという感想もありましたが、使用したマイクのハウリングが気になるなどの反省点も残る大会となりました。

今後岩見沢館では休館時にビブリオサークルのメンバーによるミニビブリオバトルを開催する計画もありますので楽しみにしていてください。開催時はホームページでお知らせします。



(岩見沢館 伊藤 実木子)

書評コンテスト2012 優秀賞

人生の師となる本との出会い

中居 みよ (教員養成課程教育臨床専攻)

「この本はぼくも気に入っている。中身についてはおかしなところは何もないと思う。ただ、問題が細切れに分かれてしまっているが。ほんとうを言うと、幸福も細切れに分かれているのだ。」このような冒頭で始まるこの本は、プロポ(哲学断章)として新聞に毎日掲載されたものがもととなっており、さまざまな題について各3ページほどで書かれている。誰しもが求める幸福、というものについて、不機嫌、悲しみ、憂鬱、恐れなどの幸福ではないとされる状態について例を挙げながら考察していく。そして不幸な考え方方に陥ってしまう原因を解き明かし、幸福になるための方法を述べている。読んでいてはっとさせられるような、まさに至言というべき言葉が溢れている本、と言って良いだろう。

まず、幸福になる為の方法として挙げられているのは、考えを変え、悲しくなるような思考から抜け出すという事だ。例えば、「辛い判断や、不吉な予言、いまわしい過去の出来事をよくよと考えれば考えるほど、自分の悲しみがさまざまと蘇ってくる。それはつまり、悲しみを味わっているようなものだ。」というアランの指摘は鋭い。我々が悲しみに浸っている時、そのことについて何度でも考えてしまう。わざわざ辛さを感じるように自分で自分の首を絞めているのだ、ということを教えてくれる。まずは自分が辛さを感じている原因に気付くことが悲しみから逃れる第一歩だと教えてくれる。

次に、述べられていることは身体の動きと幸福についてである。「想像力というのは、肉体の運動器官がそれと正反対の運動を実行している時にはそれほどの働きはしないものだ」と著者は言う。感情のままに行動するのではなく、礼儀作法を守った行動によって、怒りや悲しみという自分の精神の働きを抑え込もう、という考え方である。確かに、行動によって感情を抑えることもできるかもしれない。しかし、現在では礼儀作法を守るべき場が減っていることも確かである。家庭や学校の中で礼儀を大切にする、という雰囲気が失われつつある今では、礼儀作法の重んじられる場所に身を置かないときでも、我々が意識的に礼儀正しくいよう、と努めなければならないだろう。これは、訓練であると言える。「礼儀作法をわきまえるというのは、すべての身振りを通して、すべての言葉をつくして、「いらっしゃないように。われわれに与えられた人生のこの瞬間を台なしにしないように」と示すこと、ということである。」という言葉を、心が乱れた時には思い出すと良いのではないだろうか。

「情念のはたらきの中には必ず、取り返しのつかなさに対する抵抗のようなものがある、とぼくは思う。」「しかし、道はすべて通り過ぎた道だ。ひとはまさしくいる所にいるのだ。時間という路上では、後もどりすることも、同じ道を二度行くこともできないのだ。」「われわれが耐えねばならないのは現在だけである。過去も未来もわれわれを押し潰すことはできない。なぜなら、過去はもう存在しないし、未来はまだ存在しないのだから」

これらの言葉はそれぞれ、咀嚼していくうちになるほど、という納得を与えてくれる。自分の状況に気付き、視界がぱっと広がったような気がする。我々は悲しみや後悔から抜け出せずに、狭い自分の思考の中に入り込んでしまったとき、近くにいる人の言葉が心に響かことがある。どんな言葉も、自分の事と考えられなければむしろ否定の対象となりがちだ。しかし、この本は今まで考えもしなかったような考え方方が出てきたり、一読しただけでは理解できないような難解な表現があったりと、読者に対して読み返したりしながらじっくりと読むことを要求する。分かりやすく、読みやすい本であるとは言えないが、それは我々にゆっくりと自分自身の心と向き合う時間を与えてくれるのである。そしてそれは、陥っている自分の考え方から抜け出す手助けをしてくれる。

「幸福になることは、いつでも難しいことなのだ。多くの出来事を乗り越えねばならない。大勢の敵と戦わなくてはならない。乗り越えることのできない出来事や、ストア派の弟子などの手に負えない不幸が絶対ある。しかし、力いっぱい戦った後でなければ、負けたというな。」この言葉は、最も私の印象に残った言葉である。幸福は、じっと待っていればやってくるものではなく、自分でつかむものである。著者の強い言葉には、幸福を求める人々への強いエールが感じられる。

人生の中で、立ち直れないような悲しみや、不幸だと感じられることにも出会うだろう。そんなときには一度、この本を開くべきである。我々は、本の中のアランの楽観的な考え方、という幸福へのかけらをあさっているうちに、幸福への道をまた一歩、歩きだせるのではないだろうか。そうして、この「幸福論」という師に学びながら、力いっぱい戦ってみるべきだと思うのである。

アラン著『幸福論』(岩波文庫 1998年)

書評コンテスト2012 佳作

中国文学を貫くもの

小田 健太 (教育学研究科教科教育専攻)

本書は「I」「II唐以前」「III唐」「IV唐以後」「V」「VI」の六章から構成されている。「I」には、「中国文学における希望と絶望」や「中国文学に現われた人生観」など四篇の文章を収める。「II唐以前」には、「新しい慟哭——孔子と「天」——」や、日本でも広く知られている陶淵明について書かれた「陶淵明詩の訓詁」など七篇、「III唐」には、李白や杜甫、白居易などについて書かれた十篇が収録されている。「IV唐以後」では、宋（960～1278）から元（1279～1367）、明（1368～1661）、清（1662～1911）に至るまでの詩や戯曲について述べられている。「V」には「芭蕉と杜甫」「啄木讃」など、日本文学にまつわる各篇が収められている。「啄木讃」では、啄木の、

真夜中の
俱知安駅に下りゆきし
女の鬢の古き痕あと

という短歌を引いた上で、「これも私は虚構だと思っている」とコメントを加えている。北海道に住むものとしては、身近に感じる一節である。「VI」は、「詩と月光」「新しい夕陽」の二篇によって構成されている。各篇は、新聞や全集の月報、跋文など、各種の媒体に発表された文章である。中国唐代（618～906）を中心に、古くは紀元前から、下つては清朝までの文学について広く論じられている。

さて、本書の一つの特徴は、「善意」という言葉が繰り返し用いられていることである。それは、著者が、「中国の文学を貫くもの、それは人間の善意への信頼であると、私はかねがね考えている」（73頁）ことに起因する。「人間の善意への信頼」は、五經の一つである『詩経』からすでに顕著であると述べられている。「最古の文学『詩経』三百五篇の背後にある人生観は、人間はその善意によって、個人としても社会としても、完全に幸福であり得るという楽觀である」（39頁）とするのがそれである。同じく『詩経』について、「人間をもって人間の努力をこえた運命の支配の下にある微小な存在と見る態度は、この古典ではむしろ微弱である。そうして人間の努力による善意の回復が、常に期待されている」（67頁）とするのも、同様の指摘である。『詩経』と同じく古代の作品集である『楚辞』については、「詩は、しばしば懷疑におちいり、絶望におちいる」としながらも、「それにもかかわらず、それら懷疑と絶望をのりこえて、強くさけびづけられる自己主張は、善意の回復への期待がなお強烈であることを思わせる。それは運命の支配に屈服したがらない精神である」と述べている。『楚辞』の根底に流れる善意を読み取っているのである。

こうした吉川氏の中国文学観には、異議がとなえられることもある。小倉芳彦氏は、吉川氏の『中国の知慧』（新潮社、1953）に対する書評（『歴史学研究』第169号、1968.9）の中で、吉川氏の言を引用しながら次のように述べている（旧字は新字に改めた）。

「論語をつらぬいて流れるもの、それは要するに、ふてぶてしいまでの間肯定の精神、……（小倉氏による中略）人間の善意への信頼である」とか、……とくりかえし言われても、そういう善意への信頼とか、絶望を超えた善意というような表現に対して、そういう表現が本来もつべき切実さ、深刻さを感じ取れないでのある。

たしかに吉川氏の断定はやや性急かもしれない。そうではあるが、「詩経の詩人は、なかなか絶望しない。したがって呼びかけをやめない」（82頁）、「要するに不幸は、一時的、局部的であり、幸福はやがて回復されねばならない。それが人間の本来である」（同）などといった、古代人の純粋で、また純粋であるだけに強烈な、生きるための思想が存在したであろうことを、吉川氏の記述によって、私たちはたしかな手触りのものとに想像することができる。『詩経』の人々から数千年下ったわれわれに、彼らの望んだ善意が回復されているか。おそらくはされていない。もしかすると、回復すべき善意を追求し続けることこそが、最大の善意であるのかもしれない。

ここまで、鍵語の一つである「善意」を中心に、本書を紹介してきた。『詩経』『楚辞』といった古代の作品集に関する文章の紹介に傾き、具体的な作品を例示することもできなかった。本書は多くの具体的な作品を例示した上で、『詩経』『楚辞』以降、清朝までの二千年以上にわたる文学について縦横に論じている。それらについては、ぜひ本書を手に取って読んでみていただきたい。各篇はそれほど長くなく、興味のある時代や、詩人について書かれた文章だけ読むことも可能である。

中国は、はるか紀元前から文学に挑み続けてきた国である。そして、中国の文学が、著者の言うように、善意に貫かれているもの、あるいは少なくとも善意を志向するものであるとすれば、中国には信頼すべき多くの善意が存在することになる。文学とは、名のない多くの享受者のものもあるのだから。

吉川幸次郎著『詩と月光：中国文学論集』（筑摩書房1964年）

書評コンテスト2012 佳作

衣食足りて、榮辱を知る～現代人に問いかける『史記』～

酒井 和（教員養成課程国語教育専攻）

「倉廩実ちて、則ち礼節を知り、衣食足りて、則ち榮辱を知る」という一節が『荀子』牧民篇に記されている。

道徳が先にあるのではなく、生活の余裕があつて、はじめて道徳がついてくるという考え方である。人間が礼法と節義を知り、なにが榮誉か、なにが恥辱かを自覚するようになるためには、国庫が豊かになり、衣食が充足するのが前提である。経済が安定してこそ、人間はモラルの涵養に心がけるようになるのだ。

（本書第四章「衣食足りて、榮辱を知る」より）

先の東日本大震災において「衣食足りて、榮辱を知る」ということを痛感させられた人は少なくないのではないだろうか。被災地における略奪行為や、都市部を中心とした地域での買占め行為が報道される度に、複雑な思いが込み上げてきたものである。これらの行為に対する痛烈な批判もあるが、いざ自分がその立場に置かれたときに、果たして同じように批判できるだろうか。

孔子を中心とした儒家の思想では、行いが清らかで私欲がなく、そのために貧しいという「清貧」こそが良しとされてきた。例えば、道に志し、仁につくと決めた以上、それを貫くために陥った貧困ならば、かえってそれを楽しむべきだという考えである（『論語』述而篇）。私欲に溺れ、利を追求する者を批判的に捉えようとする考え方である。かかる考えは今日の我々の中にも根付いていよう。日本においても士農工商という身分制度の中で、商人は利を追求する下賤な者とみなされていた。如何せん私利私欲を追求する人間は悪いイメージを持たれやすい。

そこに一石を投じたのが司馬遷『史記』の中の「貨殖列伝」なのかもしれない。この「貨殖列伝」でとりあげられた富豪家たちは、素封家という言葉にふさわしく、天子諸侯から授けられた官位も、与えられた領有地もなく、ただ己の才覚を存分にはたらかせ、富材を築きあげた人々である。司馬遷はこの列伝で、いかにも物質主義的で、儒学でいうところの聖人と対照した人々をとりあげ、賞賛している。現代に生きる我々の中にもこのことに違和感を覚える人がいるかもしれない。儒学が重んじられていた当時であれば尚更であろう。しかし、異端者とも言える司馬遷の考えは、自由奔放でありながら、しっかりと現実に目を向けた実践的なものであった。当然のことながら、司馬遷の考

えが理解されるのにはかなりの時間を要した。そして、この突飛な思想にスポットライトを当てたのが本書である。

本書では「貨殖列伝」について細かく考察されている。しかし単に人々が欲望を追求することを礼賛するものではない。冒頭に挙げた「衣食足りて、榮辱を知る」ということを裏打ちするものである。堅実に富を蓄え、礼節を重んじる素封家たちを細かく分析し、今日の私たちの経済活動に対するヒントを暗に示している。欲望を否定せず、むしろ肯定し、投資や生産、売買などの経済活動を積極的に推奨することで国を豊かにする考えは、アダム＝スミスの自由放任主義、つまり現在の日本やアメリカ、ヨーロッパなどの先進諸国の経済活動の根底にある思想に通じるものがあるだろう。そして、それによって富を得た人々のあるべき姿を筆者林田氏は「貨殖列伝」を通して我々に訴えかけている。つまり、富むことではなく、富んだ後の我々の振る舞いに重点を置いているのだ。日本に住む我々は平和に甘んじ、それなりに富を持つ者がほとんどであるが、本書を手にとることが己の立ち居振る舞いについて見直すきっかけになるものと思われる。

本書は、経済的な面においても政治的な面においても学ぶべきところの多いものである。『史記』がそれまでの精神論的な思想に囚われない、実践的かつ現実的な書であることに注目し、今日にも通じる政治・経済の参考書としての『史記』を紹介しているという点で、本書は大変奇抜で興味深い。資本主義社会に生きる我々にとっては、何かと興味をそそられるものも多いだろう。金に汚く心が荒んでしまった人々で溢れかえっている世の中だと嘆く人にこそ、本書を手にとっていただきたい。それまでとは違う視点から、世の中を見つめなおすことができるようになるだろうから。

林田慎之助著『富豪への王道 史記・貨殖列伝を読み解く』
(講談社 2007年)

書評コンテスト2012 佳作

図書館戦争～表現の自由を守りぬくために～

高橋 夢奈 (教員養成課程養護教育専攻)

『表現の自由』。この言葉を聞いて、何を思い浮かべるだろうか。日常生活において、当たり前のように保証されているこの権利。もしも、表現の自由が認められない世界になってしまったら…。『図書館戦争シリーズ』は、表現の自由が奪われた世界と、自由を取り戻すために立ち上がった人々の物語である。

時は2019年。公序良俗を乱し人権を侵害する表現を取り締まる「メディア良化法」が施行された世界が舞台である。強行的にメディア良化法を運用するメディア良化委員会。合法的に検閲が実行されていく。彼らにより、テレビから、本から、どんどん言葉が狩られていいく…。委員会による言論弾圧に唯一対抗できる「図書隊」。本を、そして表現の自由を守るために、一人の女性が図書隊に入隊するところから物語は始まる。

あらすじだけ見ると堅苦しい内容のように思えるが、実際は主人公やその仲間たちの成長と恋愛を主軸に物語が進むため、普段本を読み慣れていない人でも非常に読みやすくなっている。読書が好きな人にとっては、先の展開が見えやすいため、少々単調に思えるかもしれない。が、このシリーズの真髓、作者の意図は、シリーズを読み終えて初めてわかる。主人公とともにドキドキし、ときには涙し、幸せな気持ちで読み終える…。そのときふと、表現の自由が守られてよかったと思えるのだ。

表現の自由は、書籍や新聞、雑誌、テレビ、インターネット…様々なところで保証されている。規制されてしまえば図書館戦争のように、暮らしからどんどん表現が狩られしていく。最初はちょっとしたところから規制が始まっていく。別にそのくらいいいだろう、というちょっとした表現の変更。そこから気がつかないレベルでどんどん表現が規制される。気がついた頃には、表現だけでは収まらない、もっと大きな何かを狩られている。作者は何度もこの危険性を訴えていた。自由だからといって、そこに甘んじてはいけない。自由はふとした瞬間、簡単に奪われる。私もこの本を読むまで表現の自由について考えることはなかった。せいぜい公民の授業で聞いたことがあるくらいだ。検閲などは、昔行われていたものくらいにしか考えていなかった。しかし、現在「リアル図書館戦争」と呼ばれるような法律が制定されようとしている。東京都青少年健全育成条例改正案は、その代表例だ。表向きは子供たちを守るためとなっ

ているが、法の拡大解釈で個人の嗜好にまで制限をかけていくことが可能である。現在法律の適用範囲は非実在青少年、すなわち漫画などの創作物に限られている。法律に反対する人の多くはこれらの作品のファンであり、興味のない人にとっては法律が可決しようがしまいが関係ない。しかし、もしも可決してしまえば、それを皮切りにすべての表現にまで法律の適用範囲が拡大する恐れがある。気がついた頃には、漫画が日本から消えてしまっているかもしれない…。図書館戦争に書かれていることはフィクションではない。実際に起こりうることなのだ。

作者はあとがきで、図書館戦争のような世界にはなってほしくないと述べている。現在日本は先に述べた法律の他、書籍や新聞等では不適切な表現（いわゆる放送禁止用語）の規制が増加、それにより作者の意図が曲げられていることもある。表現の自由は、すでに脅かされているのかも知れない。表現規制に真っ向から立ち向かった作品である図書館戦争シリーズ。このシリーズを読んで、少しでも表現の自由について考えて欲しい。一人一人が表現の自由と向き合い、考えていくことで、作者の願いは達成されるはずだ。

有川浩著『図書館戦争』シリーズ
(メディアワークス 2006-2008年)

書評コンテスト2012 佳作

希望の旅立ち

西内 正志（教育学研究科高度教職実践専攻）

人間に種類なんてあるのか。本書は「自分らしさや社会で生きていくとは」という疑問を若者が織り成す世界を通して描いた作品である。

登場人物は5人。主人公の賢司はコンピュータ系会社のサラリーマンとして何不自由ない生活をしていた。しかし朝から晩までコンピュータと向き合って仕事をする意味や理由がわからなくなり退職してしまう。対照的に高校の同級生である凌一は、思いつきと勢いで好きなことをやっていく生き方をしていた。やがて自らがデザインした服を扱うブランド「ストロボ・ラッシュ」を立ち上げる。椿は凌一が通っていた服飾専門学校の助手教員で、派手な外見とは裏腹に基本の洋裁技術の枠から抜け出せない自分とは異なる凌一の創造性に惹かれてブランドに参加する。カツオは服飾系の留学経験と抜群のセンスを持つ低姿勢の少年で、見るに堪えない自分を輝かせてくれるファッショントを楽しむ目的でブランドに参加する。ユミコは賢司の同期で彼の仕事姿に惹かれて恋人となるが、退職を機に別れた後毎晩のように会社の愚痴を留守電するようになり新会社設立を提案する。

物語は賢司が退職する朝から始まる。初めは定職にも就かず好きなことばかりやっている凌一たちをどこか見下していた賢司だったが、誰かに指示されるわけでもなく自分たちの意志で熱心に活動する姿をうらやましく感じるようになる。特に夢や目標が無い賢司はストロボ・ラッシュのメンバーと過ごす時間が増すにつれ徐々に引き込まれていく。やがて展示会への出展を決意した凌一たちから度外視してきた経営管理を依頼される。メンバーとも打ち溶け仕事にやりがいを感じるようになった賢司はストロボ・ラッシュの展示会成功を自らの使命と感じるようになり充実した日々を過ごすようになる。そんな矢先事件が起こる。展示会まで一刻の猶予もない時期に凌一と椿がホテルに行く理由で休んだのだ。その行為自体やそれを平気で容認するカツオの姿に一体感を感じ始めていた賢司は嫌気がさしてしまう。さらに出展直前で凌一から展示会への参加を取りやめたことを聞かされる。理由は出展に間に合わせるために創った作品が自分の理想とかけ離れていることだった。その発言や行動を到底理解できない賢司。やはり自分とは違う世界の人間なのだという思いが湧き上がる。

本書は賢司から見た視点で描かれている。会話中心の軽快な文章はその場にいるかのように読みやすい。また異なる特徴を持つ精選された登場人物と、誰しもが抱いたことのあるテーマを用いることで、身近にいる若者の日常を垣

間見ているような親近感を覚える。冒頭の問い合わせに対し本書は2つの視点を与える。1点目は賢司が自分を組織型と表し、凌一たちをあちら側（自由型）と表している点である。賢司のストロボ・ラッシュに対する態度やユミコの仕事を辞めた賢司に対する態度からは組織型から見た自由型への羨望感が滲み出る。同時に他人を巻き込みながら自分の理想からかけ離れていく現実との溝に悩む凌一や、基本の枠から抜け出せないと分析する椿、着飾らないと見るに堪えないと卑下するカツオなど、自由型が抱く不安や葛藤も表現している。

2点目は男女差である。理想を追う凌一や好きなことを楽しむカツオ、後先考えずに退職する賢司に対して、助手教員として勤める椿、愚痴や独立を提案するが働き続けるユミコの姿が対照的である。また凌一から展示会不参加を聞かされた場面では、号泣し取り乱す椿に対して、服を楽しみたいだけと無感情なカツオの姿が、別れた後毎日留守電するようになったかと思えば独立の誘いを拒否した途端連絡が途絶えるユミコの行動と、それを理解できない賢司の姿など、随所に男女の感情や行動の特徴を捉えた表現がされている。

社会で生きていくためには少なからず集団に属し他者との関係の中で自らを調節していくなければならない。筆者は、賢司に「趣向や感性など同じ方向性の人間はいるが完全に同じ種類の人間なんていない」と発言させ、ユミコには「人間に種類なんてなく自分で勝手に線を引いているだけ」と表現させている。極論を言えば、同じ人間である以上全く重なり合わない人もいなければ、個性がある以上完全に一致する人もいないというわけだ。そう考えると我々は、自分の枠を拡大したり変形したりしながら重なる部分の大小の中で他者との関係を築いていることになる。

そんな難しい印象を受ける本書のラストは、前職と同じような会社の面接を終えた賢司と、展示会の一件で揺れたストロボ・ラッシュのメンバーが楽しく遊ぶシーンで締めくくられている。組織型・自由型ともに再スタートという感じだが、そこにはそれぞれ自分の枠を少しだけ拡げた希望に満ちた新たな旅立ちの様相が漂う。同じ場所に戻ったようでもそれはもう一段上のスタート地点なのである。テーマの重さとは対照的に希望に溢れた気持ちにさせてくれる一冊である。

鈴木清剛著『ロックンロールミシン』（河出書房新社1998年）

教職員著作物受贈一覧 ~ありがとうございました~

受贈館略号 (札) 札幌館 (函) 函館館 (旭) 旭川館 (釧) 釧路館 (岩) 岩見沢館

◎伊田 勝憲

- ・コンピテンス：個人の発達とよりよい社会形成のため
に
陳惠貞〔ほか〕編、ナカニシヤ出版、2012.3
(注)執筆者共著 (釧)
- ・仮想的有能感の心理学：他人を見下す若者を検証する
速水敏彦編著、北大路書房、2012.2
(注)執筆者共著 (釧)
- ・中学・高校教師になるための教育心理学
心理科学研究会編 第3版、有斐閣、2012.4
(注)執筆者共著 (釧)

◎大津 和子

- ・現代国際理解教育事典
日本国際理解教育学会編、明石書店、2012.6
(注)執筆者共著 (札)

◎小淵 隆司

- ・自閉症の理解と発達保障
奥住秀之、白石正久編著、全国障害者問題研究会出版
部、2012.8 (釧)

◎片山 晴夫

- ・文学の径を歩く：透谷・藤村から現代へ
片山晴夫著、蒼丘書林、2012.11 (札, 旭, 釧, 岩)

◎角 一典

- ・生活クラブ生協・東京 組合員に関するアンケート
(2010年) 報告書
西城戸誠・角一典編、法政大学人間環境学部、2011.11
(旭, 釧, 岩)
- ・冷熱エネルギーによるまちづくりの現状と課題IV—岩
見沢市における取組ー
(北海道教育大学旭川校社会学研究室調査報告 vol.9)
角一典編、北海道教育大学旭川校社会学研究室、2012.3
(札, 函, 旭, 釧, 岩)

◎後藤 秋正

- ・杜甫詩話：何れの日にか是れ帰年ならん
後藤秋正著、研文出版、2012.11 (札)

◎佐々木 謙一

- ・経済学の基礎学力：学びはドリルからはじまる
佐々木謙一著、大学教育出版、2007.5 (旭)
- ・経済リテラシーを高めるためのやさしい経済学入門
山岡道男〔ほか〕編著、早稲田大学アジア太平洋研究
センター経済教育研究部会、2007.3
(注)執筆者共著 (旭)
- ・地方分権化への挑戦：「新しい公共」の経済分析
齊藤慎編、大阪大学出版会、2012.1
(注)執筆者共著 (旭)

平成25年2月15日現在（敬称略、五十音順）

(札) 旭川館 (釧) 釧路館 (岩) 岩見沢館

◎鈴木 明彦

- ・北海道詩集 No.59 2012年版
北海道詩人協会、2012
(注)執筆者共著 (札)
- ・脱原発・自然エネルギー218人詩集
コールサック社、2012.8
(注)執筆者共著 (札)
- ・詩と思想詩人集
土曜美術社出版、2012
(注)執筆者共著 (札)

◎瀬戸 健一

- ・省察力を高める実践テキスト：生徒指導のあり方を問
う
瀬戸健一著、風間書房、2012.4 (札)

◎竹内 浩康

- ・秋月觀暎先生追悼集
[秋月觀暎先生追悼集] 発行委員会企画、丸八、2012.1
(注)執筆者共著 (札, 旭, 釧, 岩)

◎夏井 春喜

- ・「戦時期」、中国江南における田租徵収問題について
：科学研究補助金「日中戦争期・内戦期における中国
江南農村社会経済の実態と変化に関する研究」報告書
夏井春喜著・刊、2012.9 (札)

◎西村 邦行

- ・国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路
西村邦行著、昭和堂、2012.3 (旭)

◎氷見山 幸夫

- ・Towards Sustainable Land Use in Asia (III)
(SLUAS Science Report 2012)
氷見山幸夫編、2012.5 (旭, 釧)
- ・Land use/cover changes in selected regions in the world
volume VI (IGU-LUCC research reports:IL-2001-01,
IL-2002-01, IL-2003-01, IL-2005-01)
氷見山幸夫編、2012 (旭)

◎松浦 俊彦

- ・ナノの世界—It's A Small World— 報告書 (サイエン
ス・パートナーシップ・プロジェクト2012 (プランA))
北海道教育大学函館校、2012 (釧)

◎糀岡 宏成

- ・アメリカ懲罰賠償法
糀岡宏成著、信山社、2012.9 (札, 旭)
- ・敵対する思想の自由：アメリカ最高裁判事と修正第一
条の物語
A. ルイス著 糀岡宏成訳、慶應義塾大学出版会、
2012.8 (札, 旭)

LIBRARY NEWS

附属図書館からのお知らせ

全館共通 <http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/library/>

蔵書検索システムリニューアル

図書館情報システムの更新に伴い、以下のとおり蔵書検索システムをリニューアルしました。

■ 新 URL

- ・PC版：<https://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/drupal/>
- ・携帯電話版：<http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/mylimedio-ktai/top.do>

■ 簡単なタブ切り替えで、本学蔵書以外に CiNii Articles、CiNii Books、国立国会サーチ、Google Scholar 等のサイトの検索ができます。



■ 検索結果一覧から、著者、出版社、出版年などの条件を指定して簡単に検索結果の絞り込みができます。

■ 検索結果一覧から Amazon 書評にリンクしています。

リンクリゾルバ SFX の導入

リンクリゾルバは、文献データベース、電子ジャーナル、蔵書検索システム等を相互にリンクさせ、必要な文献入手できるようナビゲートするシステムです。

Ebscohost・PubMed・CiNii 等の検索結果に表示されるアイコン（以下）またはテキストリンクをクリックすると、フルテキストの入手先や、冊子体が本学に所蔵されているかどうか探すことができます。



札幌館 <http://s-opac.sap.hokkyodai.ac.jp/library/top.html>

- ・図書館利用を促進するためのイベントの企画・運営補助ボランティア「図書館学生センター」を募集しています。職員と一緒に楽しい図書館をつくりませんか？募集締め切り 4月30日（火）
- ・CiNii・電子ジャーナル・文献データベースの利用方法や蔵書の探し方、図書館利用方法などのガイダンスを実施しています。ぜひご参加ください。

〒002-8503 札幌市北区あいの里5条3丁目1-6
TEL 011-778-0288

函館館 <http://www.h-lib.hak.hokkyodai.ac.jp/>

- ・「ビブリオバトル mini」を不定期で開催予定です。お気に入りの本のプレゼンをしてみませんか？みなさんの参加をお待ちしています。
- ・新入生向けに、本の探し方や貸出返却など、図書館の利用方法についてガイダンスを行います。詳しくは、図書館カウンターへお問い合わせください。
- ・「新入生に役立つ本」をテーマに、各専攻の入門書として気軽に読める本、新生活に役立つような本を展示します。

〒040-8567 函館市八幡町1-2
TEL 0138-44-4231

旭川館 <http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/office/tosho/>

- ・新入生向け図書館ツアー・ガイダンスなどを随時受付しています。お気軽にお申込みください。
- ・開架コーナー2・3Fで書架の配置が変わりました。配架場所など不明な点があればカウンターまでお尋ねください。

〒070-8621 旭川市北門町9丁目
TEL 0166-59-1235

釧路館 <http://www.kus.hokkyodai.ac.jp/users/library/>

- ・学生の学生による学生のための「図書館学生センター」を募集します。皆さんの参加をお待ちしております。詳細は図書館カウンターまで。
- ・図書館を紹介する「新入生向けガイダンス」、文献の探し方やレポート・卒業論文作成の支援を目的とした「情報検索ガイダンス」を行います。図書館カウンターでお申し込みください。なお、各専攻の授業に組み入れることができますので、教員の皆様は図書館カウンターまでご相談願います。

〒085-8580 釧路市城山1丁目15-55
TEL 0154-44-3243

岩見沢館 <http://tosho.iwa.hokkyodai.ac.jp/>

- ・ただいま図書館センターが選んだ視聴覚資料を展示しています。また平成24年度第2回図書館ツアーで選んだ図書も学生の個性的なポップで紹介する予定です。
- ・音楽CDコーナーが完成しました。請求記号、楽器・演奏方法、作曲者で色分けして並べてありますので、今までより探しやすくなりました。また、レコード資料コーナーも準備中です。レコードプレイヤーを設置し、独特の音をゆったりと楽しんでもらうためのブースを作る予定です。

〒068-8642 岩見沢市緑が丘2丁目34-1
TEL 0126-32-0240